



今月の大槌びと

松岡 雄也さん

(28歳・大槌町観光交流協会事務局)

神奈川県川崎市で生まれ育ち、縁あって大槌町で働くことになった松岡さん。5年間過ごした町に愛着を感じ、観光の仕事に誇りを持って取り組んでいます。

町外出身者の視点をアドバンテージに

松岡さんはーターンで大槌に来たわけですが、これまでの経歴を教えてください。

松岡さん(以下松)—大学卒業後、岩手県の復興支援員として、4年間復興まちづくり会社にお世話になりました。昨年からは観光の分野でお仕事をさせてもらっていて、今年度創設された、観光交流協会で



実行委員として携わる新山ヒルクライム

働くことになりました。

現在の仕事にはどのように取り組んでいますか？

松—今までの復興支援の立場から、観光に携わる立場になって、視点ががらっと変わりました。休みの日も、県内や東北の観光地に出かけるようになりましたね。大槌の町の良いところもたくさん分かってきました。

Iターナーとしての視点も役に立つのでは？

松—そうですね。アドバンテージにできれば、と思っただいぶ感覚が薄れてきているかも(笑)。でもやっぱり、どうやったら来たいと思ってもらえるかはいつも考えます。

大槌に縁ある人達に魅力をPRしていきたい

新山高原ヒルクライムには、開始当初から実行委員として携わっていると伺いました。

松—もともと自転車が好きで協力しましたが、新山のきれいな景色や新山つつじ、何より町の人たちの沿道での声援を楽しみに、たくさんの人たちが常連になって何度も参加してくれていることがすごいと思っています。

松—僕が大槌に来たきっかけもたまたまですが、今では大槌のホタテを持って帰って、友達に焼いて食べさせるほどです。同じように、何かの縁で大槌と関わりを持った人や、大槌を応援している人たちに大槌の魅力を呼びかけていくような仕事をしたいと思っています。



5月号 藤原 有希さん
6月号 松岡 雄也さん

前号と今号の大槌びとが対談するコーナーです。様々な分野で活躍する大槌びとの皆さんが、誌面の上で出会います。「たし算」ではなく、「かけ算」の絆が、また新たな大槌を創っていきます。

藤原さん(以下藤)

松岡さんは神奈川県からのーターンと伺いました。私は県職員を受ける時に、U・Iターンに興味をもって調べていて、その仕事を志望していました。採用先は学校事務でしたけど(笑)。

松岡さん(以下松)—そうだったんですか。でも学校の子どもたちって、将来のU・Iターナーと考える事もできますね。

藤—確かに！そうですね、気づかなかった。そう思うと子どもたちへの目線も少し変わる気がします。

松—僕はあまり地元愛みたいなのを持たずにいたので、ふるさと科などで地域の事を調べたり、お祭りに参加している大槌の子どもたちを見ると、うらやましいですよ。

藤—小学生の子たちは、松岡さんの様に町外から来た人と話す機会は貴重だと思っただ、話しを聞けば自分の町の認識も変わるかもしれませんね。

松—逆に僕が大槌の事を教わることになるかも。観光の勉強にふるさと科の授業と一緒に受けさせてもらおうかな。

藤—かなり本格的に実習形式で体験しているので、勉強になると思いますよ。今度先生にお願いしておきます(笑)。

